

登録速報（適用拡大）

農薬名：ジベレリン明治

登録番号：第 6004 号

適用拡大登録日：平成 23 年 2 月 2 日

適用拡大登録内容：以下のとおり追加・変更し、別紙「変更後」のとおりとする。

①作物名「ぶどう（ふくしずく）及びぶどう（巨峰、ルビーロマン）」の使用目的「果粒肥大促進」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぶどう（ふくしずく）	果粒肥大促進	ジベレリン 50～100ppm	満開時～満開 7 日後	1 回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房または果房浸漬	1 回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内
ぶどう（巨峰、ルビーロマン） 〔有核栽培〕		ジベレリン 25ppm	満開 10～20 日後		果房浸漬	

②作物名「ぶどう（巨峰系 4 倍体品種）〔無核栽培〕」を「ぶどう（サニールージュを除く巨峰系 4 倍体品種）〔無核栽培〕」と「ぶどう（サニールージュ）〔無核栽培〕」に分離する。

③作物名「ぶどう（サニールージュ）〔無核栽培〕」の使用目的「着粒密度低減、果粒肥大促進」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぶどう（サニールージュ） 〔無核栽培〕	着粒密度低減 果粒肥大促進	第 1 回目 ジベレリン 25ppm 第 2 回目 ジベレリン 25ppm	満開予定日 14～20 日前（第 1 回目）及び満開 10～15 日後（第 2 回目）	2 回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内	第 1 回目： 花房浸漬 （ホルクロフェニロン 3ppm 液に加入） 第 2 回目： 果房浸漬	3 回以内、但し降雨等により再処理を行う場合は合計 5 回以内

④作物名「ぶどう（2 倍体欧州系品種）〔無核栽培〕」を「ぶどう（シャインマスカットを除く 2 倍体欧州系品種）〔無核栽培〕」と「ぶどう（シャインマスカット）〔無核栽培〕」に分離する。

⑤作物名「ぶどう（シャインマスカット）[無核栽培]」の使用目的「無種子化、果粒肥大促進」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぶどう (シャインマスカット) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	ジベレリン 25ppm	満開 3～5 日後 (落花期)	1回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェニロン 10ppm 液に加用)	2回以内、但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内

⑥作物名「温州みかん」の「ジベレリンを含む農薬の総使用回数」「1回」を「3回以内」に変更する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布又は枝別散布	3回以内
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布	
	浮皮軽減	ジベレリン 3.3～5ppm	収穫予定日の 3ヶ月前 但し、 収穫45日前まで		果実散布 (プロヒトロン [®] ジャスモン 1000～2000倍液 に加用)	

⑦作物名「かんきつ(不知火、ぽんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズ[®]籽(無核)、温州みかんを除く)」を「かんきつ(不知火、ぽんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズ[®]籽(無核)、温州みかん、きんかんを除く)」と「きんかん」に分離する。

⑧作物名「きんかん」、使用目的「着果安定」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
きんかん	着果安定	ジベレリン 300ppm	一番花開花期	1回	花に散布	1回

⑨作物名「かき（富有、早秋）」、「かき（太秋、新秋）」、使用目的「落果防止」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かき（富有、早秋）	落果防止	ジベレリン 50～200ppm	満開10日後	1回	幼果及びへたに散布	1回
かき（太秋、新秋）		ジベレリン 200ppm				

⑩作物名「さくら（切り枝促成栽培）」の使用時期を「休眠期（温湯処理直後）」から「休眠期」に変更し、使用方法に「切り枝浸漬」を追加する。

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 25～50ppm	休眠期	1回	切り枝全面散布 切り枝浸漬	1回

1. 当該変更に伴い、農薬登録申請書の記載事項に変更を生じるときは、その旨及び内容以下のとおり変更し、別紙のとおりとする。

〔2〕使用上の注意

(1) ぶどう

③ぶどうの品種による区分

ニ. 巨峰系4倍体品種

「(「あづましずく」等の巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない)」を

「(「あづましずく」「ふくしずく」等の巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない)」

に変更する。

「⑩ぶどう（巨峰、ルビーロマン）〔有核栽培〕に果粒肥大促進の目的で使用する場合は、早めの処理により無核化率が増加する傾向があるので、有核粒の結実を確認してから処理すること。」

を追加する。

(8) として「かき」を追加し、以下を順送りする。

「(8) かき（富有、早秋、太秋、新秋）

① 散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなる恐れがあるので、使用時期を誤らないこと。

② 本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節すること。

③ 散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行うこと。」

を追加する。

(17) 花き

⑥さくら(切り枝促成栽培)

「イ. 単独処理では効果が劣るので、温湯処理と組み合わせて使用すること。」を削除する。

別紙 【変更後】

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぶどう (ヒムロッド・シートレスを除く2倍体米国系品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 100ppm 第2回目 ジベレリン 75～100ppm	満開予定日 約14日前 (第1回目)及び 満開約10日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内
ぶどう (ヒムロッド・シートレス)	果粒肥大促進	ジベレリン 100ppm	着粒後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計2回以内	果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計2回以内
ぶどう (テラウエア) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 100ppm 第2回目 ジベレリン 75～100ppm	満開予定日 約14日前 (第1回目)及び 満開約10日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内
			満開予定日 18～14日前 (第1回目)及び 満開約10日後 (第2回目)		第1回目：花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 1～5 ppm 液に加用) 第2回目：果房浸漬 又は果房散布	
ぶどう (キャンベルアーリーを除く2倍体米国系品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 50ppm	満開 10～15日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計2回以内	果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計2回以内
ぶどう (キャンベルアーリー) [有核栽培]	果房伸長促進	ジベレリン 3～5ppm	満開予定日 約20～30日前 (展葉3～5枚時)	1回	花房散布	2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計3回以内
ぶどう (シャインマスカットを除く2倍体欧州系品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25ppm 第2回目 ジベレリン 25ppm	満開時～満開3日後 (第1回目)及び 満開10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内
ぶどう (シャインマスカット) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	ジベレリン 25ppm	満開3～5日後 (落花期)	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計2回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 10ppm 液に加用)	2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内
ぶどう (ヒロハブルグを除く2倍体欧州系品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 25ppm	満開 10～20日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計2回以内	果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計2回以内
ぶどう (ヒロハブルグ) [有核栽培]		ジベレリン 50～100ppm	満開 10～15日後		果房浸漬又は 10a 当り 70～80L 果房散布	
ぶどう (キングテラ、 ハーシートレスを除く3倍体品種)	着粒安定 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25～50ppm 第2回目 ジベレリン 25～50ppm	満開時～満開3日後 (第1回目)及び 満開10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は 合計4回以内
		第1回目 ジベレリン 50ppm 第2回目 ジベレリン 50～ 100ppm				

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぶどう (ハニーシードレス)	着粒安定 果粒肥大促進	ジベレリン 100ppm	満開 3～6 日後	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房又は果房浸漬	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内
ぶどう (サニールジュを除く巨峰系 4 倍体品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第 1 回目 ジベレリン 12.5～25ppm 第 2 回目 ジベレリン 25ppm	満開時～満開 3 日後 (第 1 回目)及び 満開 10～15 日後 (第 2 回目)	2 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内	第 1 回目：花房浸漬 第 2 回目：果房浸漬	3 回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 5 回以内
		ジベレリン 25ppm	満開 3～5 日後 (落花期)	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 10ppm 液に加用) 花房浸漬 (満開 10～15 日後に ホルクロルフェニユロンによる 果粒肥大促進処理を行うこと)	
	無種子化	ジベレリン 12.5～25ppm	満開時～満開 3 日後	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 10ppm 液に加用) 花房浸漬 (満開 10～15 日後に ホルクロルフェニユロンによる 果粒肥大促進処理を行うこと)	
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5ppm	展葉 3～5 枚時	1 回	花房散布	
ぶどう (サニールジュ) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第 1 回目 ジベレリン 12.5～25ppm 第 2 回目 ジベレリン 25ppm	満開時～満開 3 日後 (第 1 回目)及び 満開 10～15 日後 (第 2 回目)	2 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内	第 1 回目：花房浸漬 第 2 回目：果房浸漬	3 回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 5 回以内
		ジベレリン 25ppm	満開 3～5 日後 (落花期)	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 10ppm 液に加用) 花房浸漬 (満開 10～15 日後に ホルクロルフェニユロンによる 果粒肥大促進処理を行うこと)	
	無種子化	ジベレリン 12.5～25ppm	満開時～満開 3 日後	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 10ppm 液に加用) 花房浸漬 (満開 10～15 日後に ホルクロルフェニユロンによる 果粒肥大促進処理を行うこと)	
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5ppm	展葉 3～5 枚時	1 回	花房散布	
	着粒密度低減 果粒肥大促進	第 1 回目 ジベレリン 25ppm 第 2 回目 ジベレリン 25ppm	満開予定日 14～20 日 前 (第 1 回目) 及び 満開 10～15 日後 (第 2 回目)	2 回、但し降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内	第 1 回目：花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 3ppm 液に加用) 第 2 回目：果房浸漬	
ぶどう (巨峰、 ルビーロマン) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 25ppm	満開 10～20 日後	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	果房浸漬	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内
ぶどう (高尾)		ジベレリン 50～100ppm	満開時～満開 7 日後	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房又は果房浸漬	
ぶどう (あづましずく)	果粒肥大促進	第 1 回目 ジベレリン 25～50ppm 第 2 回目 ジベレリン 50ppm	満開時 (第 1 回目) 満開 4～13 日後 (第 2 回目)	2 回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内	果房浸漬	2 回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内
ぶどう (ふくしずく)		ジベレリン 50～100ppm	満開時～満開 7 日後	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内	花房又は 果房浸漬	1 回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かんきつ(不知火、ぼんかん、かぼす、はるみ、リントンネブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズヰ(無核)、温州みかん、きんかんを除く)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布	
不知火 はるみ	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布	
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5～1ppm	着色終期 但し、収穫7日前まで	果実散布		
ぼんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布	
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5ppm	着色始期～ 4分着色期 但し、収穫21日前まで		果実散布	
長門ユズヰ (無核)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布	
	着果安定	ジベレリン 50ppm	開花期～ 開花終期		花又は 果実散布	
	果皮の 緑色維持	ジベレリン 10～25ppm	収穫予定 14～30日前		果実散布	
すだち 平兵衛酢 かぼす	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		開花始め～ 満開10日後		散布	
	果皮の 緑色維持	ジベレリン 10～25ppm	収穫予定 14～30日前		果実散布	
リントンネブル	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止	ジベレリン 500ppm	満開 10～20日後の幼果期		幼果に散布	
日向夏	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	無種子化 落果防止	ジベレリン 300～500ppm	満開 7～10日後		果実散布	
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	3回以内
	落果防止		開花始め～満開10日後		散布	
	浮皮軽減	ジベレリン 3.3～5ppm	収穫予定日の3ヶ月前 但し、収穫45日前まで		果実散布 プロトロンジヤモン 1000～ 10000倍液に加用)	
きんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50ppm	収穫直後～ 収穫約1ヶ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	落果防止		開花始め～満開10日後		散布	
	着果安定	ジベレリン 300ppm	一番花開花期		花に散布	

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
びわ (3 倍体)	着果安定 果実肥大促進	第 1 回目 ジベレリン 200ppm 第 2 回目 ジベレリン 200ppm	満開予定日約 7 日前～満開時(第 1 回目)及び第 1 回目処理 35～60 日(第 2 回目)	2 回	ホルクロルフェニロン 20ppm 液に加用 第 1 回目：花房浸漬 第 2 回目：果房浸漬	2 回
かき (富有、早秋)	落果防止	ジベレリン 50～200ppm	満開 10 日後	1 回	幼果及びへたに散布	1 回
かき (太秋、新秋)		ジベレリン 200ppm				
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50～200ppm	は種前		種子浸漬	
みつば (軟化栽培を除く)	生育促進	ジベレリン 10ppm	本葉 2～3 枚時(第 1 回目)とその 2 週間後(第 2 回目)但し、収穫 14 日前まで	2 回	葉面散布	3 回以内(種子への処理は 1 回以内、は種後は 2 回以内)
みつば (軟化栽培)		ジベレリン 20～50ppm	根株伏込時	1 回	根株上面に散布	2 回以内(種子への処理は 1 回以内、根株伏込時は 1 回以内)
トマト	空どう果防止	ジベレリン 10ppm	開花時	1 花房当り 1 回	花房散布 (トマト落果防止剤と併用)	種子への処理は 1 回、1 花房当り 1 回
なす	着果数増加	ジベレリン 10～50ppm		2 回以内(種子への処理は 1 回以内、は種後は 1 回以内)		
さやいんげん (矮性(促成又は半促成栽培))	節間伸長促進	ジベレリン 5ppm	本葉 0.5～1.5 枚 展開時	1 回	茎頂部に株当り 2mL 散布	2 回以内(種子への処理は 1 回以内、は種後は 1 回以内)
しそ (花穂)	穂の伸長促進		出穂期 但し、収穫 7 日前まで		茎葉散布 (50L/10a)	
セルリー	生育促進 肥大促進		ジベレリン 50～100ppm		収穫予定 15～20 日前	
いちご (促成栽培)	着果数増加 熟期促進	ジベレリン 10ppm	休眠に入る直前(冬場の低温期)	1 株当り 6 回以内	茎葉全面散布 (1 株当り 5mL)	1 株当り 10 回以内
いちご	果柄の伸長促進		頂花の出蕾直後～開花直前	1 花房 当り 1 回	株の中心部に 5mL 散布	
いちご (親株床)	ランナー発生促進	ジベレリン 50ppm	採苗時 ランナー発生直前～発生初期	1 株当り 1 回	茎葉散布 (1 株当り 10mL)	1 株当り 1 回
きゅうり (抑制栽培)	果実肥大		開花時	1 花当り 1 回	花に散布又は浸漬	種子への処理は 1 回、1 花当り 1 回
うど (春うど)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 50ppm	伏込時	1 回	根株散布	1 回
ふき		ジベレリン 50～100ppm			全面散布	
ふき	生育促進	ジベレリン 25ppm	葉数 3～4 枚時(草丈 10～30cm 頃)			
畑わさび	花茎の抽出時期促進及び発生量増加	第 1 回目 ジベレリン 100ppm 第 2 回目 ジベレリン 100ppm	花芽分化後の 10 月下旬(第 1 回目)及び第 1 回目処理後約 10 日後の 11 月上旬(第 2 回目)但し、収穫 45 日前まで	2 回	株の中心部に 2mL 散布	3 回以内(種子への処理は 1 回以内、は種後は 2 回以内)

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
たらのき (促成栽培)	萌芽促進	ジベレリン 50ppm	伏込時	1回	駒木散布 (100~200mL/m ²)	1回
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25ppm	開花期	1花当たり 1回	花に散布	1花そう当たり 3回以内
メロン	着果促進	ジベレリン 200ppm	開花前日~翌日	1花当たり 1回	散布 (4-CPA 剤 50 倍 液に加用)	種子への処理 は1回、 1花当たり1回
シクラメン	開花促進	ジベレリン 1~5ppm	9月中・下旬	1回	花蕾を含む芽の 中心部に散布	1回
プリムラ (マコイデス)		ジベレリン 10~20ppm	11月上旬頃の 花蕾出現直後		株の中心部に 散布	
みやこわすれ	開花促進	ジベレリン 50~100ppm	1月中旬の 保温開始時から 7~10日間隔	3回	葉面散布	3回以内
きく	草丈伸長促進	ジベレリン 25~100ppm	生育期	2回以内	茎葉散布	2回以内
しらん		ジベレリン 50ppm	植付時	1回	30分間株浸漬	1回
りんどう	発芽促進	ジベレリン 50~200ppm	は種前		1回	種子浸漬
	生育促進	ジベレリン 100ppm	定植直前または 定植1~5週間後	茎葉散布		
チューリップ (促成栽培)	開花促進	ジベレリン 400ppm	草丈7~20cmの 時に7日間隔	2回以内	筒状の葉の 中心部に滴下 (1球当たり1ml)	2回以内
さつき (施設栽培苗)	茎の伸長促進 花芽分化の 抑制	ジベレリン 100~200ppm	茎の伸長初期 ~伸長終期 (開花盛期以降) 1~2週間間隔	3回	頂芽に十分散布	3回以内
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破に よる生育促進	ジベレリン 25~50ppm	休眠期	1回	切り枝全面散布 切り枝浸漬	1回
カー	生育促進	ジベレリン 50ppm	植付時 花茎伸長期	1回	球根浸漬	2回以内
スパティフィラム	開花促進	ジベレリン 250~500ppm	出荷予定期の 2~3ヶ月前		茎葉散布	
トルコギキョウ	生育促進	ジベレリン 50~100ppm	生育期間中に ゼット化した時	1回		球根浸漬
アザレア	開花促進	ジベレリン 250~500ppm	開花予定日 約1ヶ月前		1回	
アイリス	生育促進	ジベレリン 50~100ppm	植付時	1回		種子浸漬
花き類 (りんどうを除く)	発芽促進	ジベレリン 50~200ppm	は種前		1回	

8. 使用上の注意

〔2〕使用上の注意

(1) ぶどう

- ①ぶどうに関する作物名中の品種による区分は、ジベレリンに対するぶどうの反応性の違いを考慮した区分なので、ぶどうの品種がどの区分（品種群）に該当するか、病虫害防除所等関係機関に確認してから使用すること。
- ②下記③の「ぶどうの品種による区分」に記載のない品種に対して本剤を初めて使用する場合は、病虫害防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用すること。
- ③ぶどうの品種による区分
 - イ. 2倍体米国系品種
「マスカット・ベリーA」「アーリースチューベン（バッファロー）」「旅路（紅塩谷）」
 - ロ. 2倍体欧州系品種
「ロザリオ ビアンコ」「ロザキ」「瀬戸ジャイアンツ」「マリオ」「アリサ」「イタリア」「紫苑」「ルーベルマスカット」「ロザリオ ロッソ」「シャインマスカット」
 - ハ. 3倍体品種
「サマーブラック」「美嶺」「ナガノパープル」「キングデラ」「ハニーシードレス」
 - ニ. 巨峰系4倍体品種
「巨峰」「ピオーネ」「安芸クィーン」「翠峰」「サニールージュ」「藤稔」「高妻」「白峰」「ゴルビー」「多摩ゆたか」「紫玉」「黒王」「紅義」「シナノスマイル」「ハイベリー」「オーロラブラック」
（「あづましずく」「ふくしずく」等の巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない）
- ④降雨や、異常乾燥（フェーン現象等による異常乾燥）の心配の無い日を選んで処理すること。
- ⑤処理後の天候急変（降雨、異常乾燥）で本剤の吸収が不十分になるおそれがある場合には、ジベレリンを含む農薬の総使用回数の範囲内で再処理を行うことができる。なお、再処理に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受けること。
- ⑥本剤は樹勢の弱い樹や登熟の悪い枝等に対しては、効果が不十分なので使用を避けること。樹勢がやや強めの方が安定した効果が得られるが、極端に樹勢が強い場合はかえって効果が出にくいので樹勢の管理には十分気をつけること。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- ⑦本剤の使用により、着粒が安定するとともに果粒の肥大が促進されるので、着粒過多（過密着）による裂果発生のおそれがある。また、果梗が硬化し脱粒しやすくなるので、裂果や脱粒を未然に防ぐため、開花前の整房や着粒後の摘粒等の栽培管理を適切に行うこと。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- ⑧使用時期や使用濃度を誤ると、花振り、着粒過多（過密着）、有核果混入等のおそれがあるので、使用時期、使用濃度は厳守すること。
- ⑨無種子化を目的とした着粒前の処理の際は、特に丁寧に処理することを心がけ、薬液が花蕾全体に十分いきわたるよう注意すること。
- ⑩果粒肥大促進を目的とした着粒後の処理の際は、薬液が付きすぎないように、処理後ぶどうの枝やぶどう棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とすこと。
- ⑪本剤をぶどう（2倍体米国系品種）に無種子化・果粒肥大促進の目的で使用する場合、第2回目処理を浸漬で行うときは100ppmで処理すること。また、第2回目処理を散布で行うときは75～100ppm（80～100L/10a）で処理する。散布で行う場合、散布処理は浸漬処理に比べ果粒肥大がやや劣ることがあるので、健全な樹に対して行き、薬液が果房に十分かかるように注意すること。

- ⑫ 本剤とストレプトマイシン剤を併用することで無核果率の向上を図ることができる。使用に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。また、ストレプトマイシン剤の使用上の注意事項を厳守すること。
- ⑬ 本剤をぶどう（デラウェア）〔無核栽培〕で使用する場合、満開予定日約 14 日前よりも早く処理するときは、花振りすることがあるのでホルクロルフェニユロン剤を加用すること。
また、ホルクロルフェニユロン剤を加用して処理する際は、ホルクロルフェニユロン剤の使用上の注意事項を厳守すること。
- ⑭ 本剤をぶどう（巨峰系 4 倍体品種）〔無核栽培〕の果房伸長促進の目的で使用する場合は、必ず花房だけを目掛けて花房全体が十分濡れる程度に部分散布する。
この時期に誤って大量の薬液が枝や葉にかかると、その翌年に発芽不良などの新梢の生育障害が起こるおそれがあるので、動力噴霧機やスピードスプレーヤなどによる全面散布は行わないこと。
- ⑮ ぶどう（あづましずく）に使用する場合、満開 4～13 日後の 1 回処理で十分な効果が得られるが、栽培方法や樹勢等によっては満開時と満開 4～13 日後の 2 回処理する必要があるため、使用に当たっては病虫害防除所等関係機関の指導を受けること。
- ⑯ ぶどう（巨峰、ルビーロマン）〔有核栽培〕に果粒肥大促進の目的で使用する場合は、早めの処理により無核化率が増加する傾向があるので、有核粒の結実を確認してから処理すること。

(2) かんきつ

<落果防止>

- ① 本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるため、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用すること。
 - ② 果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守ること。
- ### <花芽抑制による樹勢の維持>
- ① 衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しないこと。
 - ② 低温が続いた年（極端な低温の年）または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がけること。
 - ③ 散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布すること。

(3) 温州みかん

<浮皮軽減>

- ① 本剤処理により着色が遅延することがあるため、貯蔵用または樹上完熟の温州みかんで使用すること。
- ② 本剤処理により薬斑が残ることがあるため、使用に当たっては病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

(4) ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意すること。

- ① 異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がないことがある。
- ② 通常幼果 1 果当り小型噴霧器で 0.1～0.2mL 程度を噴霧する。

(5) 長門ユズキチ（無核）

長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布すること。

(6) 日向夏

日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布すること。

(7) びわ（3倍体）

- ① 本剤処理しないとすべて落果するので必ず処理すること。
- ② 樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持すること。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがけること。
- ③ 第1回目の使用時期が早すぎると果梗部のネックが発生しやすく、第2回目の使用時期が遅すぎたり、使用濃度が高い場合は果面の緑斑が残りやすい傾向があるので、使用時期、使用濃度を守ることに。

(8) かき（富有、早秋、太秋、新秋）

- ① 散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなる恐れがあるので、使用時期を誤らないこと。
- ② 本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節すること。
- ③ 散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行うこと。

(9) みつば（軟化栽培を除く）

葉の表裏に十分散布すること。高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

(10) みつば（軟化栽培）

灌水は処理の当日はさけ、翌日に行うこと。散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減すること。

(11) トマト

落果防止剤を使用した後の本剤の散布は効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、又は混用して使用すること。

(12) いちご

<着果数増加・熟期促進>

- ① 処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意すること。
- ② 本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決めること。
又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をすること。
- ③ 過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守すること。

<果柄の伸長促進>

処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意すること。

(13) セルリー

定植後約1ヶ月以内に散布すると「ス」が入りやすくなるのでさけること。

(14) 春うど

芽及び根株が十分したたる程度に散布又は瞬間浸漬すること。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行うこと。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさけること。

(15) ふき

収穫間近に散布すると効果が減少することがあるので、使用時期を誤らないこと。

(16) 畑わさび

- ① 花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理すること。
- ② 全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず2回処理すること。気温が

5℃以下では効果が劣るので1月上旬からビニール等で被覆し、保温管理すること。また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理には十分注意すること。

(17) たらき

- ① 散布は散布むらがないよう噴口の小さい散布器を用いて入念に行うこと。
- ② 薬液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておくこと。

(18) 花き

- ① 処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意すること。
- ② 処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧すること。
- ③ チューリップ
 - イ. 促成栽培（促成栽培、半促成栽培）に使用する。
 - ロ. 処理時期は草丈が7～20 cm（適期：10～15 cm）の頃である。
 - ハ. 本剤の溶液は筒状の葉の中心部1回、又は2回（7日おき）滴下する。滴下量が多くなると薬液があふれ、通常溜る量が過剰分に引きずられて流出し、効果が不安定になるので注意する。
1.0 mlの滴下であふれる場合は、保持される最大の量に止める。
 - ニ. 品種により、感受性の差異がみられるので、感受性の強い品種（ウイリアムピット、ゴールデンハーベストなど）を選んで使用するのが有利である。

④ さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決めること。

⑤ りんどう

- イ. 処理は葉が十分濡れる程度に散布すること。
- ロ. 使用時期の定植直前は苗姿3～4対葉期を目安にすること。

⑥ さくら(切り枝促成栽培)

休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理すること。